

陸前高田市矢作町出土の内耳鉄鍋

羽柴直人

陸前高田市矢作町出土の内耳鉄鍋

羽柴直人

岩手県立博物館, 020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34 Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan

はじめに

本稿で検討するのは、岩手県陸前高田市矢作町字東角地出土の内耳鉄鍋である。本資料は陸前高田市立博物館所蔵資料であるが、先の平成23年3月11日の大津波により被災し、岩手県立博物館によって回収、修復、保存処理がなされたものである。これまで、この内耳鉄鍋は、実測図が作成されておらず、年代的位置付けが検討されていない資料であった。また、津波によるダメージに加え、それ以前にも保存処理が全くなされておらず、陸前高田市立博物館から回収された際にはばらばらの状態であった。鉄の劣化のため、粉々になった部位も多く、全破片を接合できなかつたが、何とか底部から口縁部まで接合する部位を見出し、実測したものである。幸い耳の部位も本体に接合する箇所を見出し、内耳部分の状況も図化することができた。

1 本資料発見の経緯と状況 (図1)

本鉄鍋は、発掘調査で出土したものではなく開田中に偶然発見されたものであるという。陸前高田市史第二巻(陸前高田市史編集委員会1994)の記述では「昭和三十二年(1957)ころ開田工事の際に人骨が出土したが、その人骨は、頭部に鉄胃のようなものをかぶせられていた。さては武人が埋葬されていたのではと、話題になったが、鑑定の結果、内耳鉄鍋であると分かった。内耳鉄鍋は古くから流行病や疫病で亡くなった人を葬るとき、その悪霊が出てこないように、かぶせて葬った鉄鍋のことである。しかしその時期を特定するには至らなかった。内耳鉄鍋は、現在市立博物館に収蔵されているが、腐食が著しく原形をとどめていない。」とある。

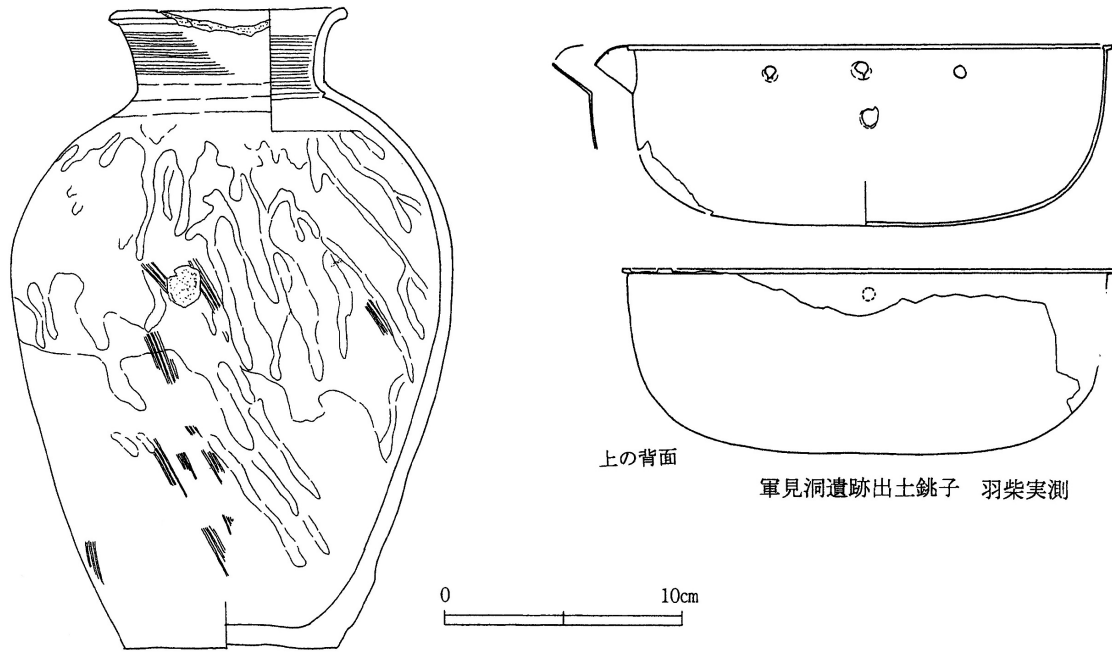
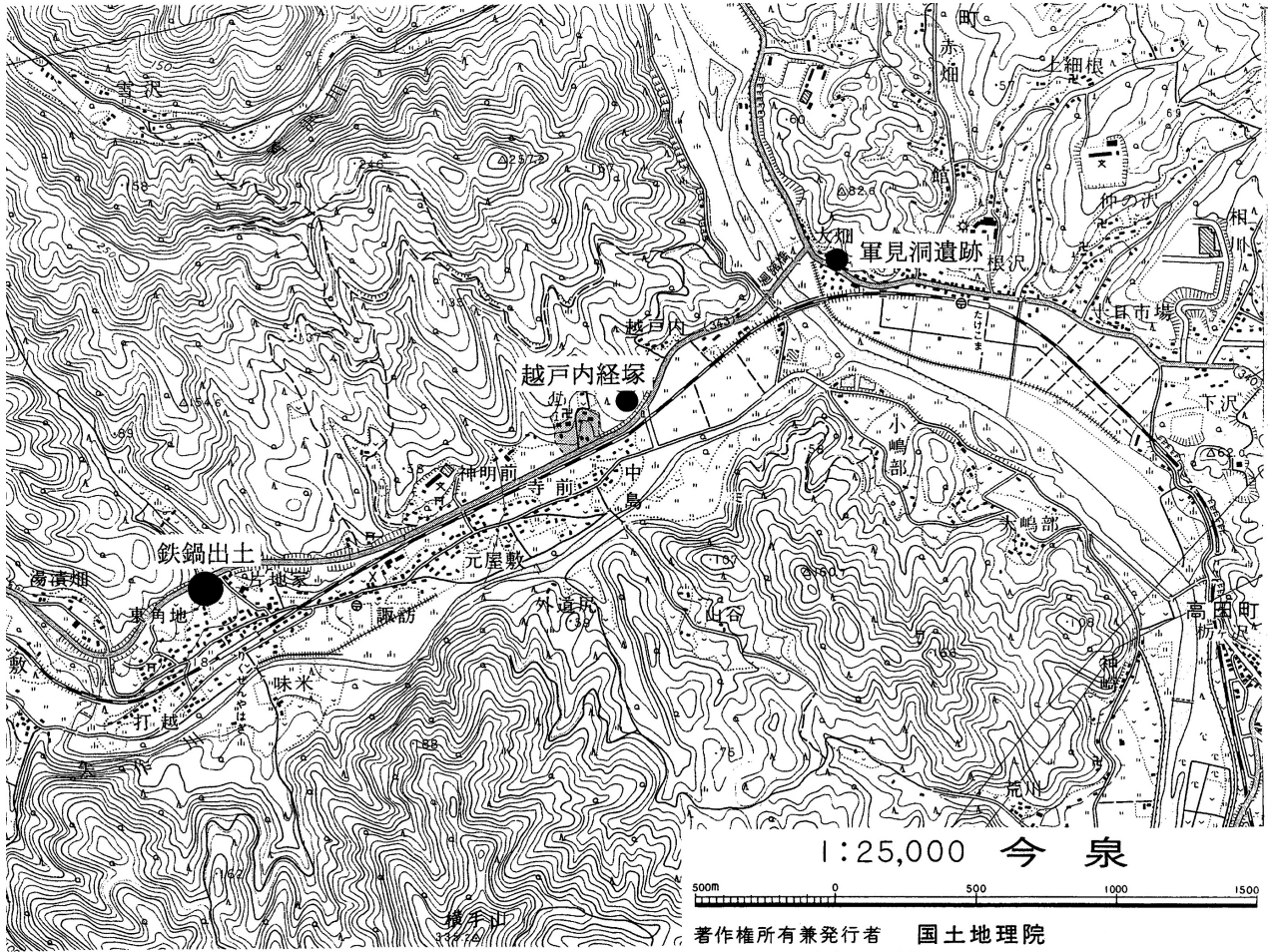
また、「矢作村概史誌第九輯」(佐々木徳吉編 発行年不明)は矢作地区内の神社を集成した内容の記述であるが、その中の菅原天神宮(矢作町字東角地所在)の項に「昭和三十三年比の地帯開田の折現地の堤地より古兜(頭蓋骨が着いていた)」が発掘されている。」

と記されている。市史の発見年は昭和32年と記され、本記述の33年と異なるが、この両者は、同じ発見内容についての記述と考えられる。

昭和37年刊行の気仙地区の遺跡分布を記した及川千代松著「遺跡を尋ねて」(及川1962)、では矢作町字東角地の東角地遺跡について、「32年11月、村上氏畑地開田にて多量の土器片等出土確認出来た。」とある、この記述から、鉄鍋の発見が昭和32年である可能性が高くなるが、開田工事が年末を越して昭和33年になっても続けられていることも推測され、正確には、33年になってからの発見ということかもしれない。とりあえず、ここでは発見年は「昭和32年頃」と理解しておく。

出土場所であるが、厳密な出土地点は特定できないものの、矢作村概史誌の記述から、東角地地内の菅原天神神社付近と推測される。さらに概史誌に「堤地」からの出土と記されるが、以前、現在の国道343号線の路線内から北側にかけて溜池が存在していた。この溜池は、昭和52年の航空写真では確認できるが、昭和23年の航空写真では存在していないようであり(写真が不鮮明で明確ではないが)、溜池が昭和32年頃の開田に伴って造成されたもので、その用地内からの出土という可能性も考えられる。これらを考慮して、図2に推定される出土地点を示している。推定される出土地点の立地は、東西方向にのびる丘陵の端部と位置付けられる。この付近は、昭和62年に国道改良工事に伴い発掘調査がおこなわれている(岩手県文化振興事業団1988)。遺跡名は「東角地遺跡」で縄文時代前期を中心とする遺構と遺物、16世紀代と推測される中国産染付片と水路跡、16世紀末～17世紀初めと推測される採掘坑跡が検出されている。現行の岩手県遺跡情報検索システム(平成23年度版)では該当遺跡は「東角地館」となっており、中世城館としての種別も加えたものに変更されている。

出土状況であるが、市史と矢作村概史誌の記述から

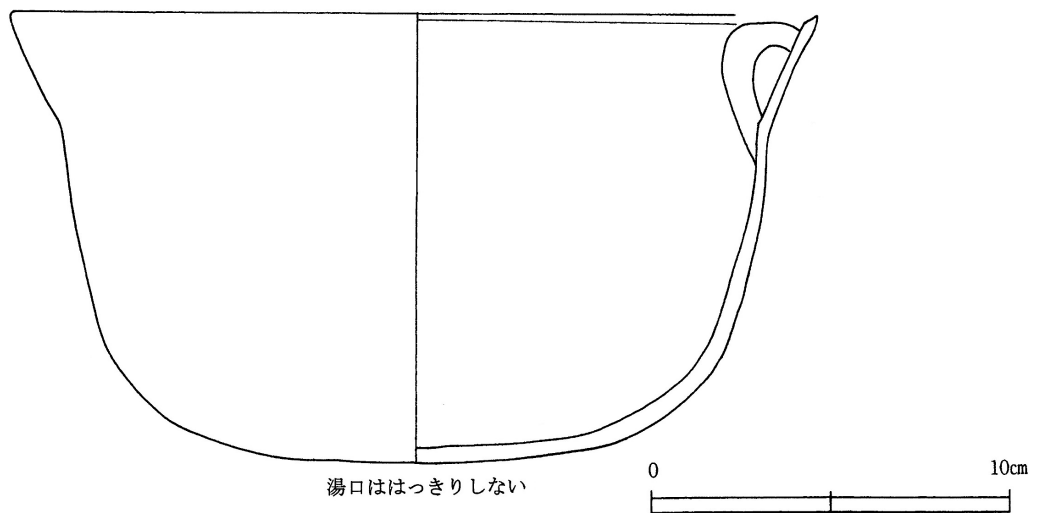
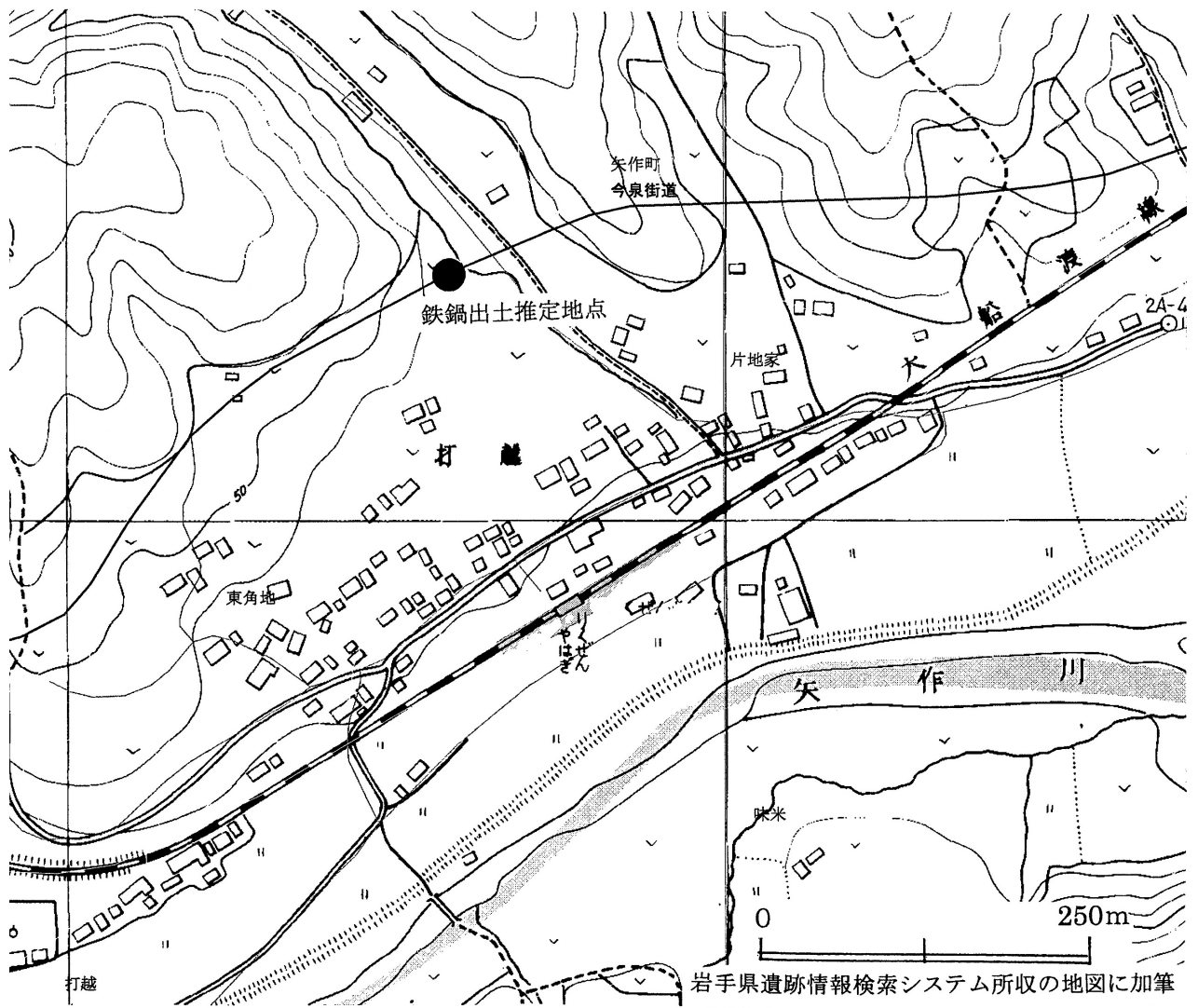


越戸内経塚出土渥美産壺

故佐々木洋氏（陸前高田市立博物館嘱託学芸員）実測

実測日 2006年3月30日

図1 鉄鍋出土場所と周辺の関連遺跡・遺物



陸前高田市矢作町字東角地出土内耳鉄鍋実測図

図2 鉄鍋出土推定地点と鉄鍋実測図

は、埋葬人骨の頭部に鍋を被せた「鍋被り葬墓」と理解される。しかし、後述する本資料の年代観が、一般的な「鍋被り葬墓」の年代よりも頭抜けて古いものであり疑問が生じる。これについては後述する。

2 本資料の形態 (図2)

本資料は、鋳物の鉄製の鍋である。前述した通り、腐食により、ばらばらの状態であり、粉々になり接合できない破片も多数あった。また、歪み、亀裂も著しく生じており、測定部位によって器形が異なってしまう状況であった。よって実測図の器形は、複数箇所での測定をおこない、平均的な部位が表現されるように調整したものである。以下に示すのは実測図上での法量、器形となる。

法量：口径は22.6cm、器高は12.6cmである。小型の鍋といえる。器厚は4mm～5mmで、口縁部付近がやや薄く、底部付近が厚くなっている。

器形：口縁部は直線的に外反する。口縁部と体部の境界は自然にゆるく曲り、明瞭な稜、段は存在しない。また、底辺部にも明瞭な稜は無く、体部から底部への境界がない形態である。底部は膨らみが少ない扁平な形状である。耳は半円形の形態である。耳は2個分確認できているが、単位は不明である。湯口はX線写真で観察しても形状がはつきせず、腐食により不明瞭になっている可能性もあるが、明確な大型の湯口ではなく、小型の不明瞭な湯口と推測される。

3 本資料の年代的位置付け

五十川伸也氏は内耳鉄鍋（五十川氏は鍋Cとする）の変遷を3段階に分類して捉えている（五十川2011）。

第1段階は11世紀～12世紀頃の年代である。柳之御所遺跡（(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1995）出土の鉄鍋をその標準としている。その特徴は、「口縁部が緩やかに外反する形態を示し、胴部から底部にかけて、ゆるやかな曲線を描くような形状を示す。底部外面の中央には丸形湯口が残っている。」とする。また耳については、「半円形の薄い板に穴をあけたような形状をしている。～耳の個数も古いものでは、対向する位置にひとつずつある」とする。

第2段階は13世紀～14世紀の年代である。器形の特徴は「口縁の屈曲もあり、胴部と底部の間の屈曲が明確で胴部が直線的になっている。底部中央に一文字

湯口が残る。」とする。

第3段階は15世紀～16世紀頃の年代である。特徴は「口縁部が斜め上方に直線的に伸び、胴部がほぼ鉛直方向に直線的であり、底部にいたる屈曲はきわめて明瞭である。また口縁部長に対する比率が高く、中世半ば以前のものと比較して、口縁部の発達が著しい。」とする。また耳は「丸く屈曲するものとL字状をなす形状のものが多い。」としている。

この五十川氏の変遷区分の中で、本資料は第1段階の鉄鍋に当てはまる。器形は口縁部が緩やかに外反する形態を示し、胴部から底部にかけて、ゆるやかな曲線を描くような形状を示しており、五十川氏が示す第1段階の特徴と非常によく合致している。本資料の湯口は、先に示したように不明瞭であるが、柳之御所遺跡の鉄鍋の丸湯口も、近世以降の鉄鍋にみられるような大型のものではなく、非常に小型のものであり、本資料の湯口も、小型である故に不明瞭になっている可能性が考えられる。また、耳についても、五十川氏の示す形状に合致し、個数についても、実物として確認されているものは2個であり、「対向する位置にひとつずつある」という特徴に合致する可能性が高い。保存処理では、耳を3個と想定して復元してしまったが、1対に修正する必要があるかもしれない。

いずれにせよ、2～3段階の鍋の特徴である口縁部の屈曲、胴部と底部の間の屈曲は本資料には見出せないものであり、第2、第3段階に属する要素は全く無い。以上の点から、本資料は五十川変遷の第1段階に相当し、その年代は11世紀～12世紀に属すると位置付けられる。

4 11世紀～12世紀の内耳鉄鍋の事例 (図3)

五十川変遷の第1段階の内耳鉄鍋は、柳之御所遺跡の内耳鉄鍋を指標としているが、近年、この他にも、良好な資料が出土している。ここでは全体的な器形が伺える事例を示す。

仁昌寺Ⅱ遺跡の鍋 (岩手県一戸町)

半裁（実際は約1/3強程度）された状態の鍋が出土している。耳部分がない破片であるが、内耳鉄鍋と判断される。報告書（(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2002）の実測図では頸部に稜が表現されているが、写真をみる限り頸部の屈曲は、それほど明瞭ではない。また胴部と底部の境界には稜、屈曲は存在しない。底部は扁平な形状であり、湯口は底部中

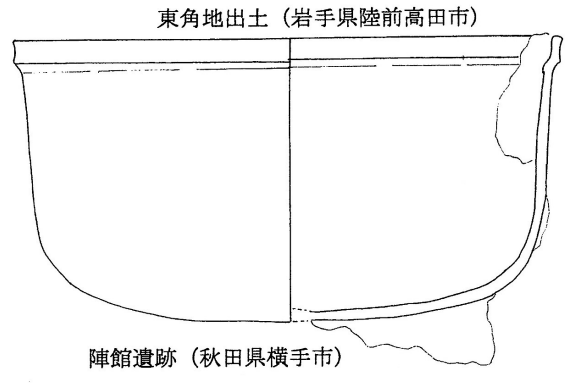
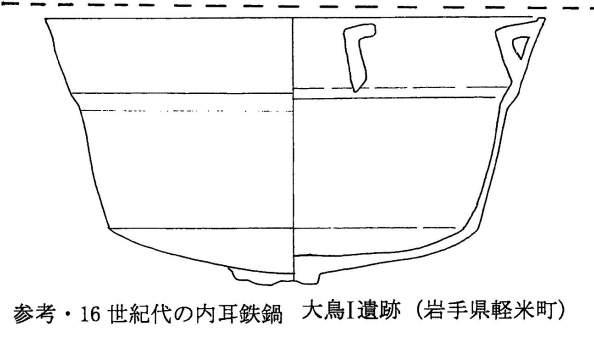
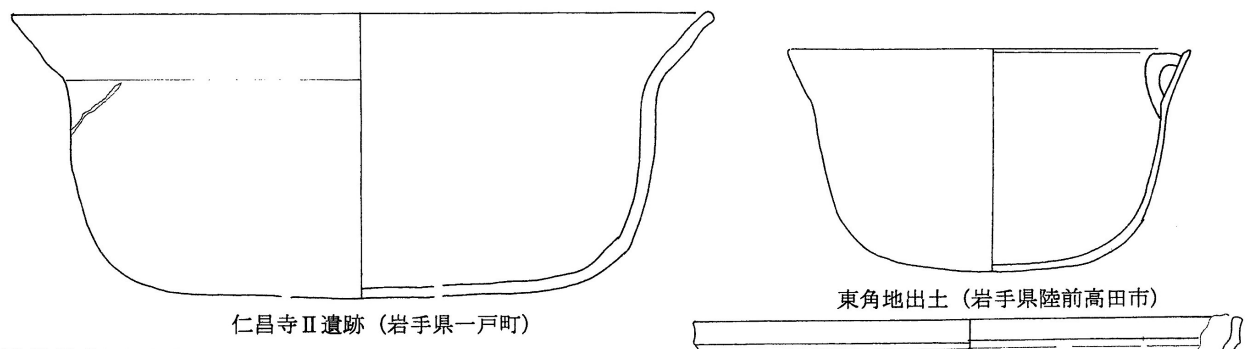
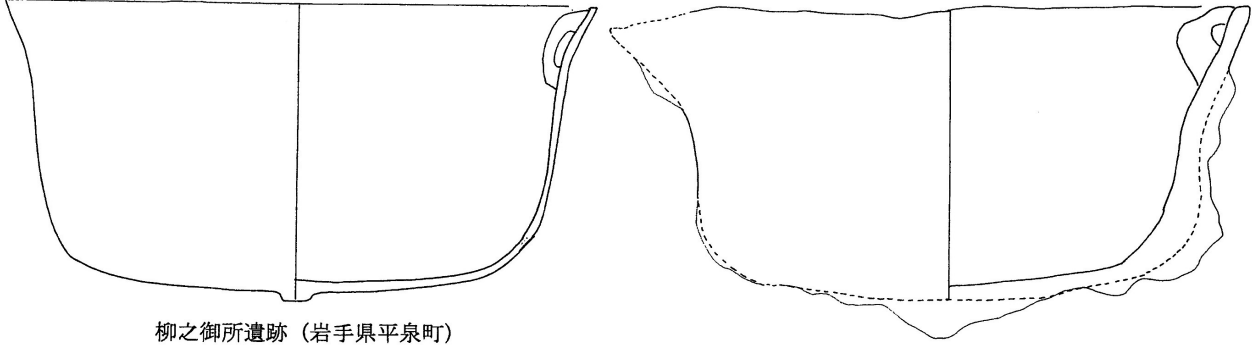
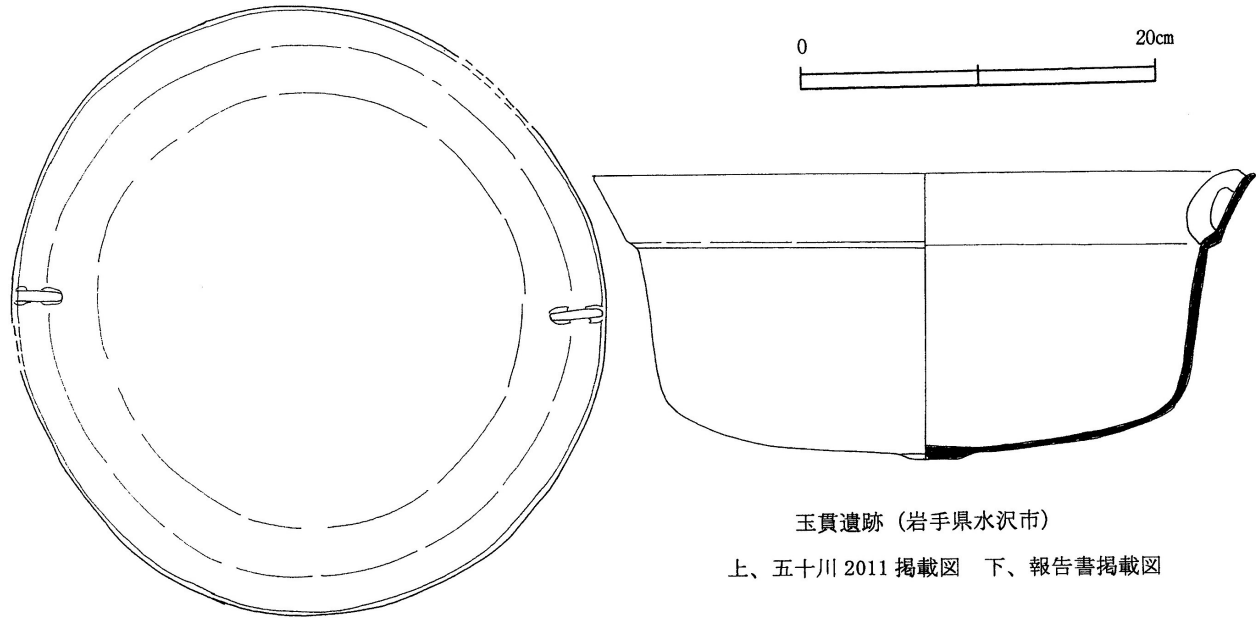


図3 11世紀～12世紀の鉄鍋集成図

中央の部位が残存しておらず、形状は不明である。このような器形の特徴は、五十川変遷の第1段階に当てはまる特徴である。報告書ではその年代を13世紀代としているが、12世紀代以前と捉えるべきである。鍋の形態からの年代観のみではなく、出土遺構（1号工房跡）で共伴して出土した15枚の鎧の小札の年代は11世紀後半～12世紀前葉であり（報告書で示された年代）、鍋の年代が12世紀以前であることを裏付けている。また、仁昌寺Ⅱでは遺構外からではあるが、12世紀代に位置付けられる劃花文青磁碗、常滑、渥美産の陶器片も出土しており、鍋の年代観を補強している。

陣館遺跡の鍋（秋田県横手市）

調査者らが後三年合戦の「金沢柵」と推定する遺跡から、2010年に出土した鉄鍋である（横手市教育委員会2011）。この報告書には上述の五十川氏が寄稿（五十川2011）しており、出土鉄鍋の特徴、年代観が詳細に検討され、五十川変遷の第1段階に位置付けられている。鍋は1/2弱の破片で耳部分は付いていない。頸部には屈曲があり、短い口縁部が直立している。胴部と底部の境界には稜、屈曲は存在しない。底部は扁平な形状である。このように頸部の屈曲は柳之御所遺跡等の鍋と形態が異なるが、胴部から底部の形態は共通であり、第1段階に位置付ける根拠となっている。頸部の形状の違いは地域差なのであろうか。湯口は底部中央が欠損しているため、明確にはできないが、中央付近までの部位がある破片にもかかわらず、湯口が全く確認できないことから、大振りの一文字湯口等ではなく、小振りな湯口である可能性が高い。

玉貫遺跡の鍋（岩手県金ヶ崎町）

五十川氏の分類では13世紀とし、第2段階に位置付けられている資料であるが、共伴遺物の年代観から12世紀に属する資料とするのが妥当であり、形態も含めて検討する。なお、この鍋が12世紀代に属する可能性の高いことは菊地徹夫氏が柳之御所遺跡の鉄鍋が発見された段階で明確に指摘している（菊地1992）。

鍋は1978年の調査（(財)岩手県埋蔵文化財センター1981）で出土している。竪穴建物からの出土であり、竪穴建物の床面を「やや抉りようにして」、正位の状態で出土している。この竪穴建物からは、12世紀代の手づくねかわらけ、常滑産陶器甕が出土しており、遺構自体は12世紀に属することは疑いない。鍋の形態について検討するが、指摘しておきたいのは、報告書掲載の実測図と、五十川氏が分類に用いている実測

図は異なったものを使用しているということである。筆者はこの鍋を実見したことがあるが、歪み、錆びの膨れが著しい状態のまま、保存処理はなされているものの、本来の形態を判別するには難しい状況であった。報告書掲載の実測図は、この状況を忠実に写しとったものと捉えられる。それに対して、五十川氏の使用した実測図は頸部の段が明瞭に表現されているものであり、実測図作成の際に、段の「読み取り」が行われたことが伺える。筆者の感覚ではあるが、実物から明瞭な段を読み取るのは困難に感じられ、頸部の段の表現は、事例が多い中世後半の鍋の形態からの影響による表現と想像する。報告書掲載の実測図をみると、頸部には段、稜がなくそのまま外反する口縁部に続き、胴部と底部の境界にも稜や段がなく、そのまま扁平な底部に続いている。この器形は、正に五十川変遷の第1段階に位置付けられる形態である。共伴遺物から導き出される12世紀という年代観とも合致するものであり、劣化による形態の損ねを考慮しても、報告書の実測図の方が妥当なものであると個人的には考える。X線写真等を利用しての再度の観察が必要と痛感する。

以上、これまで13世紀として扱われることの多かった仁昌寺Ⅱ遺跡、玉貫遺跡の事例も12世紀のものとして捉え、提示した。これらの複数事例から、北東北地方では12世紀以前の鉄鍋がある程度普遍的に使用されており、その形態も共通する要素が読み取れ、時期的な特徴として妥当性があることが明確にできた。そして、同様の器形的特徴を有する東角地の鍋も、12世紀以前のものであることを明確にできたと考える。

5 中世後半の内耳鉄鍋の事例（図4）

12世紀以前の鍋との形態の違いを示すため、比較資料としてこれまで実測図が示されていなかった当館所蔵の中世後半に位置付けられる内耳鉄鍋資料を提示する。資料は二戸市金田一字野月出土の内耳鉄鍋である。野月は金田一中学校付近の字名であるが、詳細な出土場所は不明である。中学校の敷地は中世城館「四戸城」の一部であり、それとの関係も予測される。具体的な出土状況は記録されていないが、共伴したと思われる「歯」があり、「鍋被り葬墓」の出土と伺われる。実測図は当館学芸員阿部勝則が1997年（埋蔵文化財センター在職時）に作成したものである。口径は28.2cm、器高15.7cmで、三耳式の内耳で、一文字湯口を有する。底部には銅による「鋳掛け」の補修痕があ

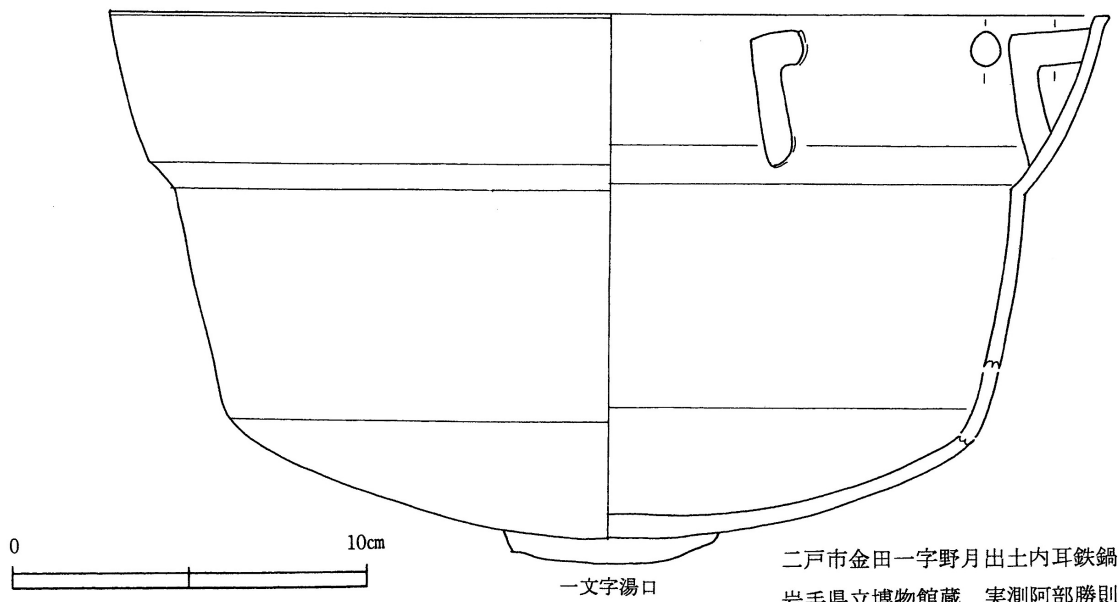
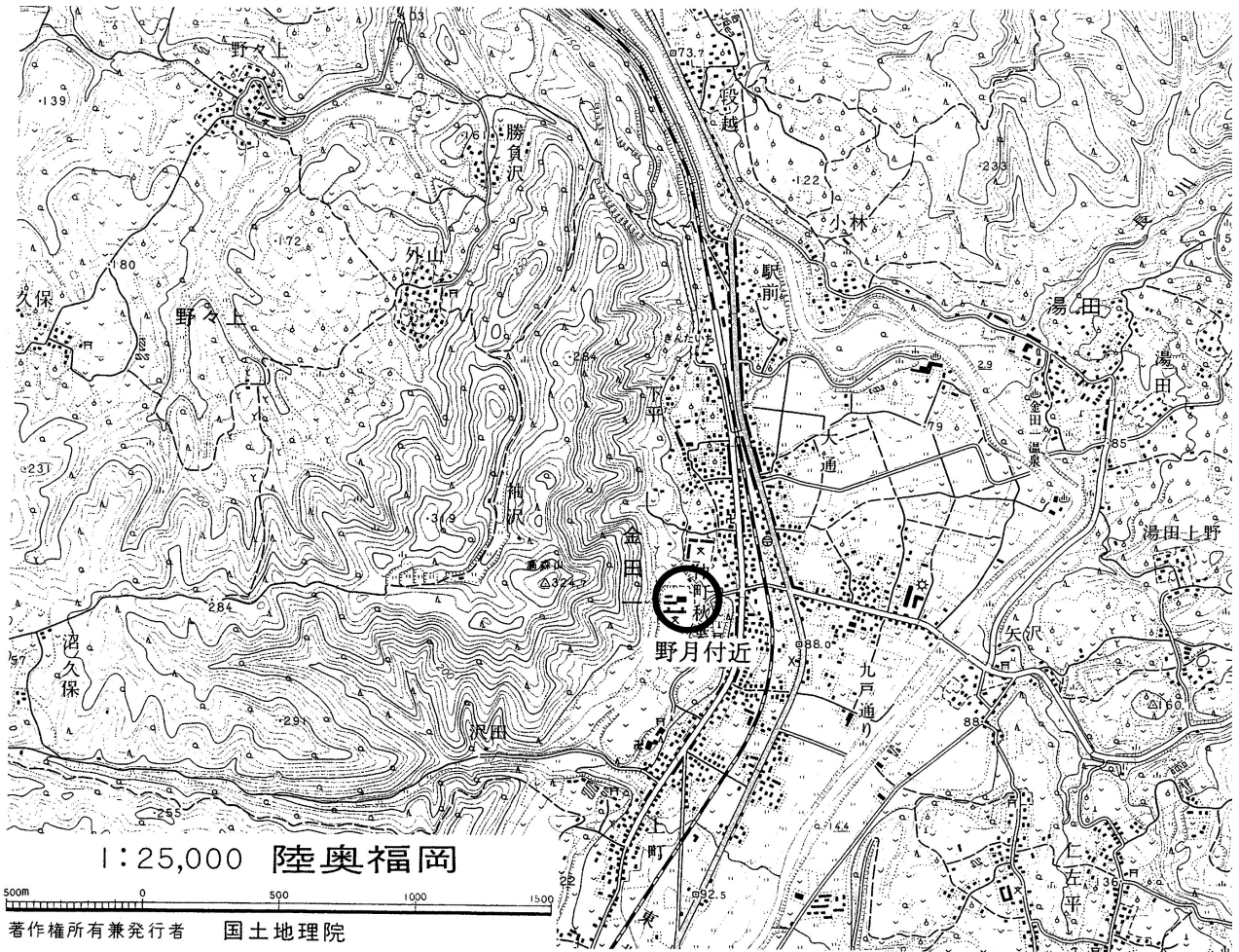


図4 二戸市金田一野月出土の内耳鉄鍋

る。頸部には段が、胴部と底部の境には稜が明瞭にみられ、口縁部は長く外反する。阿部の指摘では、軽米町大鳥 I 遺跡の鉄鍋（阿部 1997）と分量、形態が酷似するという。これらの形態を先の五十川氏の変遷に当てはめると、15 世紀～16 世紀頃の第 3 段階に相当する。阿部は大鳥 I 遺跡の内耳鉄鍋の年代を共伴した模鑄銭の年代観から「16 世紀～17 世紀初」と推測しており。五十川変遷の年代観と大きな齟齬はない。いずれにせよ、今回の東角地鍋とは器形、稜線、段の有無など、特徴が大きく異なっていることが明示でき、時代差を納得させる呈示と考える。

6 本資料は鍋被り墓に伴うものか

陸前高田市東角地出土の内耳鉄鍋は、上述のように、頭部に鍋を被せた「鍋被り墓」と判断される状況での出土と伝えられている。これについて検討する。

問題となるのは、鍋被り墓の一般的な年代と、12 世紀以前という本資料の年代観とは齟齬が生じることである。中世東北地方の鍋被り墓の変遷について、井上雅孝氏が明確にまとめている（井上 2002）。それによると鉄鍋に先行して、陶器の鉢を頭部に被せる埋葬が 15 世紀代に限定して存在するという。事例としては北海道上ノ国町と青森県下北郡川内町で確認されており、陶器鉢の年代から双方とも 15 世紀代の埋葬とされている。そして、鉄鍋による鍋被り墓の開始は、古く見積もっても 15 世紀末頃で、盛行するのは、16 世紀代以降としている。下限については筆者も考察をおこなっているが（羽柴 2002）、19 世紀初め頃という結果になっている。このような鍋被り墓の変遷からすると、本資料が鍋被り墓であれば、全国でも最古の事例ということになってしまう。その場合、13～14 世紀の鍋被り墓の空白時期が生じ、さらに鉄鍋に先行して、陶器鉢を頭部に被せる埋葬が先行するという想定とも矛盾することになり、はなはだ不自然なことになってしまう。

井上雅孝氏は東北地方の中世において、「鍋被り墓」とは異なる、鍋を埋納する「鍋埋納」の呪術が存在することを指摘している（井上 2004）。その事例としては青森県浪岡城内館の事例をあげている。この遺構は、鉄先、鎌、葶引金、轡、刀、釘などの鉄製品を縄で括り、それを伏せた鍋で覆い、土坑に埋納したもので、埋納時期は 15 世紀中～後半頃としている（浪岡町教育委員会 1986）。調査者である工藤清泰氏（工

藤 1995）はその目的を、城館、屋敷地の普請に伴う地鎮めの用途としている。また井上氏は、伝承、民俗事例も引用して、これらが空間、時間の境界を意識しているものと解釈し、「境界に対する意識を基にした信仰から、外的の進入を防ぐ、場（土地）を清める等の効力を求めた地鎮めの儀礼であることは間違いないように思われる。」と「鍋埋納」の性格についてまとめている。浪岡城内館の鍋埋納遺構の年代は 15 世紀中～後半頃とされ、「鍋被り墓」の初現期の 15 世紀末頃よりも先行しており、「鍋埋納」は、「鍋被り墓」よりも古い時期からおこなわれていた呪術と解釈できる。

そして、東角地の内耳鍋遺構の性格に係わって問題になるのは、「鍋埋納」が 12 世紀代まで遡るかということである。通常、遺跡から鉄鍋が完形で発見される場合、それは埋納行為に係わる確率は非常に高い。鍋の本来の用途は煮炊具で、土中に埋めて使用するものではないし、鉄素材はリサイクルされ、遺跡には残らないのが通常である。この点からすると柳之御所遺跡の内耳鉄鍋も意図的な埋納によるもので、「鍋埋納」遺構である可能性が非常に高いと考えられる。柳之御所遺跡の鍋は堀（東側）の底面で横倒しの状態で出土しているという。堀は空間を囲むものであるから、これも境界部での出土ということになり、井上氏の指摘する「鍋埋納」の在り方に合致し、この「鍋埋納」の呪術が 12 世紀に遡ることを伺わせる。また、玉貫遺跡の鉄鍋も堅穴建物の床面に正位に置かれた特異な状況での出土であり、これも一種の「鍋埋納」遺構に相当すると考える。この堅穴建物も遺跡の北端部である段丘崖際に位置しており、地形の境界部といえる地点に相当する。

これらの 12 世紀の事例から、東角地の内耳鍋も「鍋埋納」であり、いわゆる「鍋被り墓」には当てはまらない遺構と考えたい。しかし、この鍋が人骨、頭骨に被せられた状態であったという記述も無視できない。山口博之氏は中世城館の堀から人頭骨が出土する事例に注目し、首が境界部の守護神的な意味を有する意図的な「首埋納」を想定している（山口 1999）。この見解を参考にすると、東角地の事例は「鍋埋納遺構」と「首埋納」が組み合わさった、境界部の地鎮呪術遺構の可能性も想定できる。推定される東角地の鉄鍋埋納場所は丘陵部と低位段丘の地形の境界部といえる位置である。丘陵部か低位段丘のどちらかに 12 世紀以

前の居館や何らかの施設の展開が予想される。

おわりに 周辺地域への展望

本稿では、陸前高田市矢作町東角地出土の内耳鉄鍋が12世紀以前の年代であることを明らかにし、呪術的な「鍋埋納遺構」であると推測した。

東角地の属する下矢作地区には、12世紀の渥美産壺が埋納されていた越戸内経塚（岩手県立博物館2000）も所在する。これは東角地の推定鍋埋納地点から約1.5kmの東側の距離にあたり、この地域一帯が12世紀の何らかの権力中枢の所在地である可能性もあり、巨視的な観察が必要である。また、越戸内経塚のさらに東約1kmの竹駒町大畑の軍見洞遺跡では、12世紀に属する可能性が高い銅製の銚子が出土している（羽柴2000）。これも偶然の発見であり、出土状況が明確ではないが、銚子がほぼ完形なことから埋納遺構の可能性が高く、東角地の鍋埋納遺構との類似が推測される。

引用文献

- 阿部勝則（1997）「軽米町大鳥Ⅰ遺跡墓壙出土の内耳鉄鍋」（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要XⅦ』pp61-64
- 五十川伸也（2011）「秋田県横手市金沢柵推定地陣館遺跡出土鍋C（内耳鍋）」横手市教育委員会『陣館遺跡・金沢城跡－第一次調査概報－』pp63-66
- 井上雅孝（2002）「大釜館遺跡出土の鍋埋納土坑墓について」墓標研究会『墓表研究会会報第6号』pp7-12
- 井上雅孝（2004）「鍋・銭・首の呪術世界」岩手の館研究会『館研究3号』pp29-46
- 岩手県立博物館（2000）『岩手の経塚』第50回企画展図録
- 及川千代松（1962）『遺跡を尋ねて』大船渡市教育委員会
- 菊地徹夫（1992）「柳之御所跡出土の内耳鍋」平泉文化研究会編『奥州藤原氏と柳之御所跡』pp243-261 吉川弘文館
- 工藤清泰（1995）「城館生活の一断面」『蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社 pp331-368
- （財）岩手県埋蔵文化財センター（1981）『金ヶ崎バイ

バス関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 水沢市玉貫遺跡』調査報告書第18集

- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』調査報告第131集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1995）『柳之御所跡』調査報告書第228集
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（2002）『仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』調査報告書第400集
- 佐々木徳吉編（発行年不明）『矢作村概史誌第九輯』陸前高田市公民館下矢作分館
- 浪岡町教育委員会（1986）『昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書 浪岡城跡Ⅶ』
- 羽柴直人（2000）「平泉遺跡群の提子について」（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『志羅山遺跡46・66・74次発掘調査報告書』調査報告書第312集 pp396-402
- 羽柴直人（2002）「岩手県における近世の鍋被り墓」墓標研究会『墓表研究会会報第6号』pp13-21
- 山口博之（1999）「首が護る城」帝京大学山梨文化財研究所『研究報告第9号』
- 横手市教育委員会（2011）『陣館遺跡・金沢城跡－第一次調査概報－』横手市文化財調査報告書第18集
- 陸前高田市史編集委員会（1994）『陸前高田市史第二巻』

要旨

岩手県陸前高田市矢作町字東角地から昭和32年頃内耳鉄鍋が開田工事の際に発見された。内耳鍋はその形態的特徴から、11～12世紀の年代と判断される。鍋は、人頭骨に被せられた状態で発見されたと伝えられるが、15世紀末頃から発生する「鍋被り墓」の年代と合致せず疑問がある。「鍋被り墓」に先行する呪術儀礼に「鍋埋納」、「首埋納」があり、これらの呪術がおこなわれた遺構の可能性が高い。「鍋埋納」、「首埋納」は土地境界に地鎮め的な目的でおこなわれると考えられており、周辺に12世紀代頃の居館、施設の存在が予想される。

キーワード：内耳鉄鍋、鍋被り墓、鍋埋納



写真1 矢作町東角地出土内耳鉄鍋



写真2 右・東角地出土内耳鉄鍋底面 左・二戸市金田一野月出土鉄鍋底面